第10号　平成3年(1991)6月5日
発行　東京旭川会
東京都新宿区新宿7-2-4新宿喜楓ビル
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)3363－2721
編集　東京旭川会広報委員会

ふるさと開基100年特集

故井上靖さんの詩を朗読

旭川市開基百年記念式典は九〇年九月二十日、旭川大雪アリーナで五千余人が参加して盛大に開催、東京旭川会から八木会長、矢野副会長ら多数が加わり、次代の郷土発展を誓いあった。

式典では光陽中一年の中川志乃さんが、百年記念作文のうち市長賞をえた「私たちの旭川」を力強く朗々と述べた。ついで開式宣言、坂東市長式辞、数々の表彰などがあり、明治四十年、旭川生まれの作家、井上靖さんから、ふるさとに想いを馳せた詩の朗読があった。

ついで旭川実業高校三年の戸田純司さんと旭川商業高校三年、岩田早苗さんの二人が、次の通り「旭川二世紀への出発宣言」を読みあげた。

続いて行われた祝賀行事では、姉妹都市のアメリカ、ブルーミントン市・ノーマル市、韓国水原市からお祝いのメッセージが述べられ、アトラクションとして「夢咲け北の大地」と題した市民参加の芸能ステージが華やかに繰り広げられた。

旭川二世紀への出発宣言

郷土旭川が、開基百年を迎えました。

しかし、この百年の歴史は、決して平坦な道程ばかりではありませんでした。

私達の曾祖父母は、川を渡り、道なき道を踏み分けてこの地に入り、昼なお暗い原生林を切り拓き、冬の厳しさや数々の苦難を克服し、今日の礎を築いてくださいました。

そして、私達の祖父母や父母は、たくましい開拓精神を受け継ぎ、幾多の試練を乗り越え、この地に根を張り豊かな郷土に育てあげてくださいました。

このような百年の刻を経て、郷土旭川は、雄大な自然に恵まれた人口36万人を擁する北北海道の拠点都市として、めざましい発展を遂げてきました。

今まさに、旭川二世紀の扉が開かんとしています。

この扉の向こうには、きっと素晴らしい、そして、輝かしい未来が待っています。

私達は、ニューフロンティアとして、世界中の人々と手を結び、豊かで平和な社会を築くための努力を惜しまず、世界に誇りうる旭川として、限りなく発展するよう、力を合わせていきます。

郷土旭川の新たなる歴史の幕開けと出発を、今、ここに、宣言いたします。

1990 旭川市開基100年

上空より石狩川・旭橋・常磐公園・市街地を望む　View of Asahi bridge, Tokiwa Park, and down town of Asahikawa.

特集■ふるさと開基百年記念行事

まつり、国際スポーツ、そして健康都市宣言

市内にくり出した大雪連のミコシ

イベント多彩

一九九〇年の春から秋にかけて、旭川市の開基百年を祝って、市民参加の手づくりイベント、「市民ふれあいフェスティバル」が行われた。それぞれの地区によって趣向をこらし盆踊りやスポーツ大会、百メートルののり巻をつくるというユニークなものもあった。

69万人の感動
日本のまつり・旭川

九〇年八月十日から十二日まで繰り広げられた「日本のまつり・旭川」は、全国の有名なまつり十五団体を一堂に集めて行われたもので、三日間で約六十九万人もの観客が詰めかけた。常磐公園の特設ステージでは、八匹の竜がレーザー光線で映しだされる、島根県の石見神楽。火の粉を吹き上げ、その中を勇ましく歩く、静岡県の手筒花火などが次々と披露されました。

また、昭和通りをねり歩くパレードには、多くの市民が参加したほか、首をのばしユーモラスに表情を変える、四日市の大入道や、爆竹をならし宝玉を追いかける、長崎の竜踊りなどに、沿道をうめた観客がわいた。

ステージでの最後は、青森のねぶたや秋田の竿灯、徳島の阿波おどりが一体となり、観客をも巻きこんでの一大フィナーレとなった。

一流の演技に感動
伊藤みどりさんが舞う

「'90NHK杯国際フィギュアスケート競技大会」は、旭川市開基百年を記念して、十一月二十二日から二十五日まで大雪アリーナで華やかに開催された。

この大会は、世界一流のスケーターが参加するとあって、四日間で延べ約一万三千人の観客を集めた。

妙技に会場は割れんばかりの拍手

女子シングルに出場した注目の伊藤みどり選手は、得意の三回転半ジャンプなどを成功させて見事にこの大会の三連覇を成し遂げた。

最後のエキシビションでは、各種目で入賞した選手達が、競技とは違った趣向を凝らしたスケーティングやユーモラスな演技を披露し、会場は笑いと拍手の渦とで盛り上がった。

健やかな生活を願って
健康都市宣言

体育の日の九〇年十月十日、開基百年に当り旭川市は次の通り「健康都市宣言」を行った。

近文公園の完成記念式典と併せて行われたセレモニーでは、坂東市長や代表の中学生十一人とともに約三千人の参加者が声高らかに宣言文を読み上げた。

健康都市宣言

わたくしたちのまち旭川市は、北国の厳しい風土の中で先人のたくましい精神と不断の努力によって、北北海道の拠点都市として発展してきた。

いま、新たな二世紀へ向けて、活力ある躍動都市の実現をめざすとき、健康な大地に健康な人々の営みが大切である。

そのため、本年を健康元年と

位置付け、恵まれた自然との共生を図りながら、人々の幸せの源である「健康」をまちづくりの基本とするものである。

旭川市は、すべての市民が健やかに生活することを願い、市民の英和を集めて諸施策の充実を図り、決意をこめて、ここに「健康都市」を宣言する。

輝く冬の夢飛行
旭川冬まつり

31回目の旭川冬まつりは、旭橋の河川敷広場や常磐公園などを会場に、九〇年二月七日から十二日まで開催されました。メーン会場の河川敷広場には、開基百年を記念した〝二〇〇年タワー〟など、五基の大雪像を中心に、市民手作りの大小の雪像百基あまりが並んだ。また、氷彫刻世界大会が開かれている常磐公園では、市民による氷彫刻コンテストが行われ、家族連れや会社のグループなど七十チーム百四十人ほどが、懸命にノミを振るった。

十一日には、〝一〇〇年タワー〟に設けられたスノーステージで開基百年の幕開けを祝うオープンセレモニーが、華やかに繰り広げられた。

百発の花火を合図に、坂東市長が、開基百年の幕開けを高らかに宣言、小学生が作る花文字や、市民合唱団による「若い街から」の大合唱などが次々に披露され、詰めかけた大勢の市民とともにオープニングを祝った。

北海道音楽大行進

北〇音楽大行進

地元旭川で自慢の第五十八回北海道音楽大行進は開基百年とあって一段と盛り上った。六月五日午後一時、小学生以上は護国神社前を、幼児たちは市庁舎うらをそれぞれスタート、延々と大パレードをくりひろげた。

国際家具デザイン展

〝デザインは愛、木とくらし〟をテーマに国際家具デザインフェア旭川'90が、九〇年七月三日から六日間、産業振興センターで開催された。会場では、世界各地の有名なデザイナーによる作品、時代を代表する歴史的名作が展示され、多数の人でにぎわった。

花咲大橋が完成

金星橋と秋月橋の中間にかかる花咲大橋が完成、九〇年九月二十五日、開通した。

この橋は、片側二車線で長さ三四二メートル、市道にかかる橋としては最大。デザインや配色なども、景観に調和するよう数々の工夫がなされ、橋上六か所に、バードウォッチングが楽しめるバルコニーが設けられている。このほか、橋詰広場の左右岸上流には彫刻がそれぞれ設置され、「彫刻の街・旭川」にふさわしく市内で五番目の彫刻橋。この橋の開通により、春光、末広地区と新旭川地区が直接結ばれた。

道央自動車道開通

日本道路公団が建設を進めている道央自動車道の深川～旭川鷹栖間の27・2キロが、九〇年十月三十日に開通した。開通区間には北国の自然を題材にしたトンネル杭内のレリーフ、常磐、江丹別、嵐山という三つの二千メートル級トンネルがあり、札幌～鷹栖間が今までより十五分間短縮、一時間五十分程で結ばれた。

今回の開通により、道北地域だけでなく北海道全体の工業、流通、農業、観光などの産業の活性化に役立つとともに、日常生活圏が広がり、市全体の発展や活性化に結びつくものと期待されている。

近文公園が花咲スポーツ公園に

市民から募集していた近文公園（花咲町一～五丁目、運動公園）の新名称は、「花咲スポーツ公園」に決まり、九〇年十月十日に行われた近文公園完成記念式典で発表、十五人の入選者を表彰した。

また、総事業費約八十二億円をかけ、総合運動公園として工事を進めてきた近文公園は、噴水とモニュメントのある中央広場の造成を最後に、同年九月に完成した。

東京旭川会総会も14回目を迎えました

平成2年11月9日、東京・京王プラザホテルで開催

第十四会総会・懇親会は平成二年十一月九日午後六時から東京・新宿の京王プラザホテルで開催された。

桑本平八事務局長の司会で、八木祐四郎会長が議長席について議案の審議に入った。

第一号議案（平成元年度事業報告並びに決算報告）では、同事務局長から説明、黒崎弘監事から収支決算は適正に処理されている旨、会計監査報告があり承認された。第二号議案（平成二年度事業計画並びに予算案）に入った。予算案について、懇親

スウェーデン国王陛下を迎え
旭川国際バーサースキー大会

スウェーデンのカール十六世グスタフ国王陛下が、九〇年三月二十一日開催の旭川国際バーサースキー大会へご参加のため、十八日から四日間、初めて旭川においでになった。

旭川駅前でのグスタフ国王

国王陛下は、札幌から特別列車で旭川にご到着になり、駅前で待ち受けた五百人余の市民の熱烈な歓迎を受けられた。この日の午後には、早くもバーサースキー大会の会場となる旭川競馬場で、10キロのコースを試走されたほか、市内各地のご視察など、滞在中のお忙しい日程を、精力的にすごされた。

今年のバーサースキー大会は、世界的な暖冬と雪不足のため、本場スウェーデンやアメリカのバーサー大会が中止になるなか、旭川でも、関係者の懸命な努力で、5キロと10キロの2コースに規模を縮少して、ようやく開催となった。

国王陛下は、一万人あまりの参加者に向かってスタートの合図をされたあと、自らも前日の30キロに続いて、5キロのコースを楽しまれた。

百年記念式典に参加して

矢野　正康

東京生まれの私ですが、もの心ついてから旭川市の永山で育ち、永山小学校から旭川商業を卒業するまでこの北の都ですごしました。丁度、私の住んでいたのは永山農林学校の校庭の続きで朝な夕なに、遥かに大雪山の秀嶺を仰ぎ、少年期から青年期にかけて育くまれてきました。

永山のわが家から大雪の嶺々をあかず眺めていますと時々刻々と移り変わります。四季おりおりの様子も違っていて素晴しいの一語に尽きました。いまも故郷を訪れる度に大雪山に接し「あぁ、帰ってきたんだなぁ」という実感が雲のようにわきます。

こんど旭川市開基百年の式典と祝賀行事に参加のため久々に旭川に参りまして、秀峰大雪に接し、昔のままの雄姿に何かほっとした思いでした。旧旭川市内の町の様子も、また永山もすっかり変り歳月人を待たずと感じた中で大雪の山々だけは昔のまま迎えてくれました。

式典会場の「大雪アリーナ」には私を含め東京旭川会から会長の八木さん、事務局長の桑本さんの三人が参加させていただきました。イベントは企画、構成、演出ともにすばらしいものでした。とくに私の印象に残ったのは作家・井上靖先生が、旭川の木、ナナカマドに託して読まれた二編の詩と記念講演でした。

先生は「ああ、北の王都・旭川の、常に天を望む、凜乎たる詩精神――」とおっしゃり、私たちを感動させました。

最後に「旭川二世紀への出発宣言」には目頭をおさえるほど感激を覚えました。男女二人の高校三年生が鼓笛隊の先導で入場し、壇上から堂々と、高らかに出発宣言を読みあげました。

「今まさに、旭川二世紀の扉が開かれんとしています。この扉の向こうには、きっと素晴らしい、そして、輝かしい未来が待っています……」

この若い宣言の通り旭川は二十一世紀に向って大いなる巨歩を一歩、一歩と踏み出しました。これからわが旭川はどのような未来に向って展開していくのか。明るく、豊かに、大きく発展の一途をたどっていくことでしょう。

千古不変の大雪山は百年の歴史をじっと眺めてきましたが、さらにこれからの旭川をより温かく見守り続けて欲しいと願うものです。

（東京旭川会副会長）

上：料理も豪華な懇親会会場。
左：八木会長(左)から坂東旭川市長に記念品が贈られた。
下：ミス旭川も姿を見せて楽しい抽選会。

会費を一万円に増額した件で説明が、原案通り承認された。

次に旭川市開基百年記念式典に八木会長、矢野正康副会長が参列、特別功労賞を受けたなどの報告があって、とどこおりなく総会を終了した。また、東京旭川会から旭川市へ開基百年を記念して、絵画（三浦白琇画伯作「北海」）を寄贈する旨、披露があった。引き続いての懇親会は、武田陽子幹事が司会に登場、八木会長が「雪の季節の郷土旭川を偲んでご歓談下さい。来年は、また趣向を変えて実施しますのでお誘い合わせお越し下さい」と挨拶。ミス旭川の宇都宮澄子、山口二葉両嬢が八木会長、矢野副会長に花束を贈呈、祝電が披露された。北海道ふるさと連合会会長、北海道クラブ会長、旭商同窓会会長、五十嵐広三、今津寛両代議士から、ご挨拶をいただいた。

乾盃の音頭は旭川市商工会議所小山昌克副会頭。元気よく杯をあげた。会場には、旭川市のポスター、行事の写真、ビデオで開基百年の記念式典や日本のまつりの映像が流れ、郷土色いっぱい。午後七時近くになって、坂東徹旭川市長が到着。あらためて八木会長から絵画（目録）の贈呈。旭川市から東京旭川会へ感謝状が贈られた。ついで、市長は「旭川出身の作家、井上靖先生のお宅へお礼に伺い、こちらへ向う途中東京名物の交通渋帯にあい、遅れました。開基百年を記念して、旭川の神楽出身の三浦画伯の作品を、ちょうだいして感謝しております。旭川のクリスタルホールに飾ります。記念式典には、八木会長、矢野副会長のご参列をいただき華を添えていただきました。

記念事業として、三月二十一日、国際バーサースキー大会には、スェーデン国王の参加があり、夏の日本のまつりには十五の県が参加し、その芸を旭川で見ることができました。旭川二世紀に向けての大切な年を迎え人口三十六万人の都市にふさわしく充実をはかりたい」と述べられた。ここで西田育子幹事から市長へ花束贈呈、続いて旭川市関係の来賓を紹介。中には「おばんでございます」のご挨拶もあり市長選で四選を果された坂東市長をよくアシストされた優子夫人の日焼けした顔もあり歓談の輪があちこちに。懇親会のアトラクションとして二代目桜川ぴん助社中による江戸芸「かっぽれ」が演じられた。その後恒例のお楽しみ抽選会、多くの賞品寄贈があり、抽選の半券を片手に読み上げられる番号に一喜一憂。万歳三唱でしめくくった。

第8回郷土訪問旅行に72人

私のふるさと旅日記

六月四日午前十時四十分発の日本エアシステム機で出発のため、午前九時前から三々五々羽田空港JASカウンター前の東京旭川会の小旗の前に集合した。今回の一行は大城栄子副会長を団長とする七十二人である。係から渡されたリボンを胸につけ、それぞれ搭乗手続きをすませ、定刻に飛び立った。所要一時間三十五分、午後零時十五分に旭川空港に到着。六月の旭川の空気はひんやりと爽やかだった。

空港では、一行の乗った飛行機の折り返し便で、国際バーサー大会に来旭されたスェーデン国王にお礼言上のため、スェーデンに出発される坂東徹旭川市長にお出迎えいただいた。大城団長に旭川市から花束の贈呈があった。

バスで、バーサー橋、西神楽を通って昼食会場の高砂台レストハウスに向った。レストハウス前では一行の記念写真を撮った。まわりにはレンゲ、ツツジがいっぱい。朱色、うすい黄色、忘れかけていた郷土の色だった。

会場では旭川市の井上昇助役ら関係の方々が各テーブルに分散して着席、桑本平八東京旭川会事務局長の司会で歓迎昼食会が始まった。最初に大城栄子団長より昨年夏のアドベンチャー・イン旭川で三十二人の子ども達が大変お世話になったことへの感謝とお礼の言葉を八木裕四郎東京旭川会会長に代って述べられた。井上助役より旅行団一行の最年少者二歳の伊塚幸子ちゃんへ花束がおくられた。ニコニコと可愛らしい。井上助役が、「ジェット機就航記念に端を発した郷土訪問の旅も八回目。ことしは招魂祭（護国神社例大祭）の宵宮で思い出もひとしおと思う」とおっしゃった。また、小桧山享旭川市商工会議所会頭から「東京旭川会の総会、懇親会には毎年出席している。いま、開基百年以降に残す旭川を真剣に考えている。旭川市の人口は三十六万六千人をピークに減少している。会社、企業の誘致。百万人を収容する宿泊施設の確保。旭川の経済を潤す観光、経済、旭川の人間関係の温かさを伝えたい。山美しく、水清く、人の心の温かい旭川を発展させたい。東京旭川会の皆さんは旭川市をPRする大使です」と、述べられた。会食が始まり、ジンギスカン料理をかこみ、郷土の酒、ワインで乾杯。

（須藤知恵子記）

道南巡りの旅楽し

今回私は「第八回郷土訪問の旅」に初めて参加させていただいた。実は五月の中旬、旭川市立高女同窓会東京支部のお集りの折、関口和子様から、旭川会の旅行にお誘いを受けた。

六月六日、道南巡りの一行二十七人は、午前九時JR旭川駅に集合。同郷のよしみで一行の方々とはすぐに打ち解ける。九時三十分発北斗8号に乗車、いよいよ出発である。札幌でホワイトアロー6号に乗り換え、車窓に広がる北海道の原野、現われては過ぎるライラックの紫、白に眼を奪われる。列車はやがて紺青の海に沿って走る。駒ヶ岳が見え出した。

午後三時、大沼公園駅着。バスで「ホテル・ニットー大沼」へ。すぐ大沼遊覧にお出かけの方もいらしたが、私達同室の三人、団長の福原博子様と関口様はべ　でひと休み。夕食会後、七時にバスでホテルを出発、世界三大夜景の一つ函館の夜景見物に。四十分程で函館山の麓に到着。修学旅行のバスなどで身動きもならぬ渋滞、ガイドさんが「降りてロープウェイの駅まで三百メートル程歩いて下さい」という。関口様と二人暗い中をはぐれないように手を繋いで登り始めた。しかし息切れがして二人とも皆様について行けない。断念してバスに戻る。夜景は見ずじまい。

翌七日、午前九時ホテル出発、再び大沼公園駅へ。二輌編成の可愛いい函館行アイリス号に乗る。線路の両側はなつかしいエゾ松の防雪林、三十分で函館駅着。連絡船のなくなった駅は昔日の活気が見られない。

駅前から観光バスで市内観光に出発、千代ヶ台を経て五稜郭公園へ。榎本武揚が七年の歳月をかけて築いたという城。エレベーターで展望台に上ると、見事に五光星を型どった城塁が一望のもとに見渡せた。ついでトラピスチヌ女子修道院。門を入った前庭より先は立入り禁止、緑濃い樹木に包まれた館、修道女の影を見るべくもない。男子禁制の修道院の庭に、聖ミカエル像は唯一の男性である。

バスは昨夜渋滞でいけなかった函館山のロープウエイ駅に着く。七十人乗りのゴンドラで五分間で山頂へ。標高三百三十メートル。臥牛山ともいう。展望台から一望の函館市は地図の通りの海岸線、昼間見ても絶景で

高砂台レストハウスでの記念写真

ある。大森浜の啄木碑を遠く見て、函館港へと進める。船で湾内を一周。今夜のお宿は湯の川の「湯の浜ホテル」。

八日早朝、ホテル裏の砂浜を同室の方達と散策。釣りをしている人に教えられて防波堤からのぞくと、透きとおった海に無数のウグイの群。思わぬ見ものにしばし見とれる。

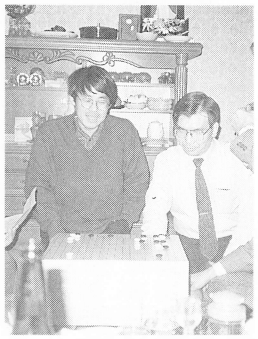
朝食後すぐにバスで函館駅前の朝市へ。毛ガニなどそれぞれに買い込んで宅急便にしてもらう。函館発午前十時十二分で札幌へ。車中配られたトウキビのおいしかったこと。洞爺駅の短かい停車中に、役員の方達の早業で買って下さったカニ弁当、これまた美味しかったこと。十三時十三分千歳空港駅着。千歳発十四時四十分、羽田に向った。

たびの旅行は快晴に恵まれ、何の事故もなく全員無事に、快適に、楽しく道南巡りを終えることができた。ひとえに役員の方々の周到な計画と、細心の気配りによるものと、誠に感謝感激である。

（磯美恵子記）

人（ひと）

名誉棋聖の小林光一さん



観戦する小林さん（左）

名人、棋聖、碁聖の三冠に輝く小林光一さんは昭和二十七年に旭川市で生まれた。十三歳で木谷実九段に入門、二年後に初段、早くから鬼才として注目された。二十歳で新鋭トーナメント決勝で趙治勲五段を破り優勝、初のタイトルを獲得した。この年、首相杯争奪戦にも優勝した。

小林さんの足跡はさながら勝利の記録の集積。ざっとあげても、昭和五十一年、第一期新人王戦優勝。同五十二年、天元戦決勝で杉内雅男九段を下した。同五十四年、九段。同五十九年、棋聖戦九段戦優勝。同年、第二十二期十段戦で加藤正夫十段に挑戦、二度目の公式戦タイトルを獲得した。

昭和六十年に名人位、天元位も獲得して、この年、「旭川市民栄誉賞」を贈られた。翌年に棋聖、名人、十段、天元の四冠王となる。平成二年に第十四期棋聖戦七番勝負で大竹英雄九段の挑戦を四勝一敗で退けて五連覇、藤沢秀行名誉棋聖に続いて史上二人目の「名誉棋聖」となる。このおりの対局のうち第二局は旭川市開基百年記念として一月三十日から二月一日まで、旭川市ニュー北海ホテルで記念行事が行われ、同年十月二日から三日間、名人戦第三局は同じく開基記念として旭川パレスホテルで開催された。

歩くのが日課で趣味はテニス、礼子夫人は木谷九段の二女。真面目な人柄は好感がもたれている。

「郷土訪問の旅」総会の席で

会員の皆様に「郷土訪問の旅」についてのアンケート調査をお願いしましたが、その結果、別表の通り三百七十七人（会員数の47％）の方から回答を頂きました。

これを参考に今後幹事会などで検討し、なるべく早い時期に会としての結論を出したいと思います。

なお、今回のアンケート調査からみて④⑤は郷土訪問の旅とは別に会の行事として実施するか否かの問題と考えます。

「郷土訪問の旅」アンケート集計

回答総数	377	総数に対する％
① 従来通り、毎年実施	80	21％
② 隔年又は3～5年毎	100	27％
③ 取り止め	15	4％
④ 国内旅行	36	10％
⑤ 海外旅行	20	5％
⑥ 無回答	126	33％

第八回郷土訪問の旅参加者

（敬称略、順不同）

大城栄子、土肥ちい子、小栗隆治、羽田陽子、太田清美、新海矩子、荻野京子、宮下弥生、地崎恭枝、斉藤寿子、河端鐵男、中田雪子、中田安雄、西田育子、坂東幸子、坂東勝利、須藤智恵子、森真弓、森由美子、高橋正夫、幸充輝、福原博子、塩野谷昭平、花輪元治、志倉美子、土屋寿次、斉藤初子、高橋文子、織田典子、伊塚清、伊塚幸絵、鴻上修一、島田嘉明、山下喜代次、山下華子、亀井歓一、福田智江子、福田哲也、福田民江、畠山龍英、白川貴孝、布目カヨ、林茂、武田陽子、矢崎利江、折登建憲、折登園枝、関口和子、小西信、橋本裕子、鈴木安之助、伊藤英子、本間敏弘、本間富美子、関晃、長谷川光彦、小須田富男、柴田静子、園城つる子、寺田慧美子、三浦久子、杉本哲男、山田勝久、高橋敏雄、原公朗、水野潔夫、磯美恵子、佐々木憲一、竹原茂雄、遠野均、古川勝吉、桑本平八

ご寄贈・ご協賛ありがとうございます。

旭川市長、旭川市議会議長、旭川商工会議所会頭、旭川観光協会会長、旭川国際バーサースキー大会実行委員会、高砂酒造、男山、十勝、サッポロビール、合同酒精、ニッカウイスキー、旭川ターミナルビル、毎日新聞社、エアシステム東京支店、佐賀商店、日立電線、薬日本堂、大心堂雷おこし、五建工業旭川営業所、プロセスアーキテクチュア、美容室テーコ、オートクチュール伊藤英子、東京美装興業、田村縫工、吉田敏明、大城栄子、本間敏弘、福原博子、佐々木憲一、八木祐四郎。

事務局日誌

元・九・一～二・八・三一

▽9月4日＝第1回幹事会、会計監査▽10月20日＝第2回幹事会▽10月27日＝第13回総会、懇親会▽12月1日＝第1回郷土訪問の旅委員会▽12月12日＝小桧山名誉顧問黄綬褒章受章祝賀会に祝電▽12月14日＝JASとの打合せ▽平成2年1月18日＝第1回広報委員会（会報編集会議）▽1月23日＝第3回幹事会▽2月14日＝第2回広報委員会（会報発送）▽3月23日＝JASとの打合▽4月5日＝第2回旅行委員会▽4月16日＝郷土訪問の旅会員募集案内発送▽5月18日＝第4回幹事会▽6月4日＝第8回郷土訪問の旅出発、大城団長他72名▽7月6日＝行事委員会▽7月30日＝実行委員会▽8月23日＝第5回幹事会

平成元年度収支決算

元・九・一～二・八・三一

（収入の部）

繰入金　五四五、三九九円
懇親会費　二、一一八、三〇〇円
年会費　六四九、〇〇〇円
名簿売上代金　五〇〇円
寄附金　四八、七〇〇円
雑収入　三、〇九四円
合計　三、三六四、九九三円

（支出の部）

懇親会費　二、二七〇、〇七五円
印刷費　三六一、三一三円
通信費　一四二、五五九円
会議費　一二〇、三四三円
交際費　五九、九三七円
事務費　五、一五〇円
手数料　一五、四二八円
雑費　一一、四九六円
支出計　二、九八六、三〇一円
繰越金　三七八、六九二円
合計　三、三六四、九九三円

以上の会計事項について監査の結果、適正に処理されているものと認めます。

平成元年九月四日

監事　黒崎　弘
　　南　栄二

〝酒学〟を教える「サントリースクール」

旭川市出身の福西英三さんが校長を勤める〝酒学〟の「サントリースクール」。アマチュアとプロの部があり、アマの部を紹介すると――。

▽先着順にワイン専科（定員四十人）カクテル専科（同五十人）▽時間＝ワイン専科毎週土曜日午後六時半から二時間、カクテル専科毎週火曜日午後六時から二時間、ともに八回で修了▽講習料各二万三千円▽「サントリースクール」は港区元赤坂一―五―三一、新井ビル2階、☎三四七〇―七七二一▽地下鉄丸ノ内線、銀座線赤坂見附駅

なお福西さんは旧旭中、旧弘前高卒、早大中退、『文学の中の酒』『カクテル入門』など著書多数。「ワイン、カクテル両専科とも一通りの知識はおぼえられます」という。

【会員動静】

▽新入会の方々

青木紀夫（勤務・柏市議会議員）
自宅＝〒二七七・柏市柏一三〇五
電話＝〇四七一―六六―六八六二

梅田良太郎
自宅＝〒二四七・鎌倉市岩瀬一〇五七
電話＝〇四六七―四四―四二二八

小柳武二（勤務・福神㈱）
自宅＝〒三三二・川口市青木三―九―一―九一三
電話＝〇四八二―五一―八六〇五

佐藤　貢（勤務・共立印刷）
自宅＝〒一七八・練馬区大泉学園町六―一〇―三〇
電話＝三九七八―五七六五

相馬正樹（勤務・東海大学）
自宅＝〒二四九・逗子市沿間五―一七―二〇
電話＝〇四六八―七三―八八四九

野田勝憲（勤務・共同印刷）
自宅＝〒一七八・練馬区大泉学園町二―三
電話＝三九二一―九三〇五

増澤麻子
自宅＝〒一〇六・港区六本木五―一三―一四―七〇一
電話＝三五八二―五九四九

山口好子
自宅＝〒一八五・国分寺市東恋ヶ窪三―二二―一五
電話＝〇四二三―二四―六〇一一

田中政市（勤務・アクセスゴルフ・ネットワーク）
自宅＝〒一六四・中野区弥生町五―一―一四―三〇三
電話＝三三八〇―五四四六

▽住所変更

五頁　伊藤英子
自宅　削除
勤務〒二三三・横浜市港南区上岡西一―一七―二六KTMビル五〇一
電話＝〇四五―八四七―二五七八

六頁　井野栄子
自宅＝〒一二一・足立区南花畑四―一二―一四―二〇九
電話＝三八八五―四四四八

二七頁　茂川トヨ
自宅＝〒三三六・浦和市領家一―六―一七
電話＝〇四八―八八六―二三二三

五〇頁　針木康雄
自宅＝一五〇・渋谷区代官山町七―二
電話＝三四六一―九四三〇

▽名簿削除

六七頁　吉田三郎

以上二年十二月一日現在会員七八〇人

事務局からのお願い

◇旭川市開基百年協賛募金にご協力ください。総会のご案内とともにお願い申し上げました募金協力については、百五十余人の会員の方々からご協賛をいただいておりますが、会員全員の総意として長く旭川市に記念として立派なものを残したいと思いますので、一口二千円、一人でも多くの会員のご協賛をお願い申し上げます。

◇会費納入について。年会費は今年度から二千円となりご負担をおかけしますが、皆様からの年会費で会の運営が賄われております。未納の方はなるべく早期に納入下さるようお願い申し上げます。

◇入、退会、住所などの変更の場合。ご入会希望の方があれば事務局に紹介下さい。入会申込書などをお送りします。また住所変更、退会についてはお手数でも、その都度事務局にご一報を。

編集後記

▽今号の発行が大幅に遅くなった。会員の中には「まだ出ないのですか」と広報委員に電話をかけてくる方もいて、すっかり恐縮する。A委員が都合がつくとB委員の都合がつかないなど一同顔をそろえることが出来なくて、おくれにおくれた次第。

▽ところで第十四回の総会・懇親会には予想よりやや集まりが悪かった。幹事さんのお骨折りで「かっぽれ」登場となったのだが〝吸引力〟はいまひとつ。いいアイデアがあったらお知らせを。

▽開基百年に東京旭川会からも多数参加する。故郷はかなりの規模で、かなりの資金をかけて各種イベントを大々的に盛り上げたというが、果して他都市からどの位お客を引き寄せたものか。もろもろを考えるとお祭り気分でうかれてばかりおられまい。

▽広報委員の二人が平成二年秋十月、旭川商業卒業五十年目の修学旅行に参加した。上野駅で旭川から上京した学友と合流、計三十余人で熱海にくり出した。昭和十六年十二月、繰り上げ卒の老OBである。「五十年は長すぎました。お互いに忘れていて『あんた誰さ』などといわれ困りました」など、往時ぼうぼう夢ぼうぼう。

▽今号も八木会長方の会議室を借用して編集に当った。総会・懇親会の写真は毎日新聞社写真部の中西浩編集委員をわずらわせた。厚く御礼申し上げたい。（I）

＊

▽本紙の編集スタッフ＝桑本平八、田村昌士、大久保藤次郎、須藤智恵子、伊藤一男、橋本裕子、高橋文子。